志賀

観世流謡曲　元和卯月本　25-001　25　志賀　国立国会図書館

面白き清水の流れつきく流れこそ都
のしるしのときなれ　杉是八幡今小
仕へ申候所也　扨も江州志賀の山
ちらどを國なるら賀人程な
ば今志賀の山路へとうきて
たりと　まことの色たるかくこの如ほらきく
長岡きの風の音羽山　吉田もしられば

書 19.9.25 国会図

観世流謡曲　元和卯月本　25-002　25　志賀　国立国会図書館

そもそもこれは
湖をきき
ほと〻に江州志賀の山より
ぬく此所
高りてい
ぬとさいて
花をかりの
ぬ桜
情

の強らを
牧馬の
ゆくらを
きる服の前
雲又紅を立
山路より日
間萬ろの
花の
影をやをとる
山ををしく来く
へつる
若の音雨と

観世流謡曲　元和卯月本　25-003　25　志賀　国立国会図書館

ゆえ松の枝にかかるもあり、宮や角や
まいて年月の寄るかわしもゞ海
ゆかしよりきたれくわしかき
やあ見ぬ山賤をうれて宴くき
新しおもを花の枝をおりうゆえ
所も華の陰あるりぞしるあるく
やあるの日新の松もあるよ休みくら

三十日

仕舞て帰りぬまつ菊うり花を
おあ事 道の日のたよりのあるら
おりうく新やおも記まの山人と
ぞ人も山水寄有しう色今更
行とかたへ山を又奥深き
山路あれた松も松原も多まれた
ぞの花の名りよやまを三十日 の新の

なもたかやまとうとうがほを八面
おきよおもはせ（二十八セリ）ありしかのごとく
そのごとくに見たまいやしきやま
かたのかすをおいて華のかをよ（中）
やまをとうとうがよ（ハ）
をきをあつまりあるまひあるしゆへ
やとうたいたまうを（ハキ）こはいたまうを

もうやまたれをうかをもやま
しをおとのがおのをきてハまを
ありきわやたれをも古歌のたと（セル）
のををもかてをこの海の色をうか（ハ）
やく（三十四）をのたとへやらんも
ぶらくをきあ卯あれたをやしき（ハ）
泉りも思ふよりて（ハ）かのが大伴の

黒髪のごとくなる老の姿
和歌のうらはかもほ草かく
たとへをく世語の人は墨
見へ侍り　ロキ　ロキ　ロキ　ロキ　上句
山かたの　元　ゆふ
きとゆるゝ　元　都へ　元　こもの
黒髪よ花の落しやきなる　元　ものや

今も筆をおして貫之が言
葉のたまのをつらぬきしとの
道とかや　元　元　元　元
ときよりを尋ぬる道の代
のつゝしへ　元　元　元
萬機の政をあそ
ばされ　元　元　元　元　元
ぬれは其ゝ時よりおこりのを

観世流謡曲　元和卯月本　25-006　25　志賀　国立国会図書館

ひろしまてさぶらへ乃御歌を樓に
日ごとに六年仙をとゝめとゝてそ
あのんとハ妙音乃菊のひいろ
ぬつぎ乃ゆゝしき末の世の露乃
色ゆゝしくこゝろハ能よ
あるとゝや十三年宮殿末乃人へ志わあ
日ごとわかまて乃川情とゝや色
ゝ

雅楽清流音しゝ山乃ゆゝ見ゝ山
の井乃ゆゝさくハ桜う里ゝ乃春乃
ゆきゝも来宮ゝ色ゝわやゝ色乃
ゝ砂ゝ乃秋ゝほゝゝゝ世の世ゝ
花乃色音ゝて乃ゝ歌ゝ歌ゝ雪の
道ゝ乃御代乃ゝゝゝゝゝゝゝ
三十一文字の形も受讓ゝ給ひく

観世流謡曲　元和卯月本　25-008　25　志賀　国立国会図書館

世見頃相乃世来も感これ給
色ハ君も安全とよ萬民ときとた
のうて都鄙国土乃雲のしら
波ハ鴻乃ほつまてもうら乃聲
萬歳乃ちきまのとけりきわ
海から代れよろつの
まつりとの直とわるも乃

東南より雲おこり西より春
きたりて花もとき乃ちまふ
うらうたの聲まてもを和琴の
詠よもしやや天地をうこかし
鬼神も感をとりや　上ロニ手ハ　宮や
ともるる山かつ乃家路乃

[illegible]
風を伺ひとりつゝ出へきはなつゝへ
大伴のちぬといふたる時代
そ此山の和尚
もこの山のうそとはづきや
松をかほもの
家のの大伴
引れは

[illegible]
青和尚のうるやはつさら
そのの山遍をさ
出たるたる花
をつくれる弁の
そわ松をとろ
面白きうそ

右百番之本者為直
傳石岡方書章句付
依波板紙形以今清書
加奥書畢

元和六年　観世左近大夫
卯月日　首家

観世流謡曲　元和卯月本　25-010　25　志賀　国立国会図書館

観世流謡曲　元和卯月本　25-011　25　志賀　国立国会図書館